

ごめんやす

同窓会訪問記・三学年の会

平成十七年六月十二日、夏を思わせる熱い日差しの中、京三三六・三七、三八回卒業生の学徒動員六十周年記念の合同同窓会第一部が新装なった母校山城高校の大会議室で開かれました。

江羅会長はじめ同窓会本部役員、橋本校長臨席のもと、出席者は三六回生二十四名、三七回生二十三名、三八回生三十二名の計七十九名でした。

会長、校長の挨拶のあと、各年度代表より活動報告がありました。各年度とも学徒動員の記憶の共通項はやはり昭和十九年十二月七日東南海地震により、中島飛行機半田製作所に学徒動員された京都第三中学校の生徒十三名が死亡した事件でした。

三十八回代表の辻宏氏は半田での同窓会では山方工場のあった場所を訪れたこと、動員中のエピソードなどを報告された。最後に氏は苦しかった半田での生活の中で「生きるノウハウを身につけ、その後の社会でプラスとなった」としめくくられた。

三十七回代表の天野光三氏は、事故から六十年目の同窓会を半田で行い、慰霊碑や宿舎・工場跡を回り、犠牲者の鎮魂と戦時下の青春に思いを巡らせたこと、「紅燃碑」設立の経緯などを報告された。

三十六回代表の高橋玲爾氏は今の高校二年生の年齢であった自分たちが動員されたときの心情・受け止めなどを話された。そして、日々の動員生活は苦しいものであり、荒れた生活だったが、懐かしきもある。現在の後輩たちに「半田」を伝えられればとしめくくられた。

三氏の報告のあと、校舎・校内見学ということで、体育館、屋上のテニスコート、中庭の「紅燃碑」をはじめ記念碑の設置予定場所などを校長・教頭・事務部長の案内で見学した。

同窓会第二部は花園会館に場所を移し行われた。六十年前の青春時代の気持ちにたちかえり、旧交をあたため、和やかなひとときを時の経つのも忘れ過ごされた。